

豆まきの由来

むかし、あるところに、金持ちのお百姓がいました。

ある日、お百姓は、田んぼの草取りに行きましたが、田んぼは、水が一滴もなくてからからでした。お百姓は、思わず、

「ああ、だれか田んぼに水を入れてくれないかなあ。もし入れてくれたら、ひとりむすめを嫁にやるんだけどなあ」といいました。

すると、若い男が来て、

「おれが水を入れてやるから、むすめをくれ」といいました。

お百姓がびっくりしてるうちに、たちまち田んぼに水がいっぱいになりました。

お百姓は心配しながら家に帰りました。すると、むすめが、

「おとうさん、そんな顔してどうしたの」と、ききました。

「じつはな、きょう、田んぼに水が一滴もなかったから、だれか水を入れてくれる者がいたらむすめを嫁にやると思ったんだ。そしたら、見たこともない男が来て、水を入れてくれた。じきにおまえをもらいに来ると思ったら、心配でな」

父親がそういうと、むすめは、

「それなら、わたし、お嫁にいきます。でも、祈年まで待つてもらってください」といいました。

その晩、男がむすめもらいにやってきました。父親が、

「祈年まで待つてくれ」というと、男は、

「わかった」といって、帰っていきました。

やがて、祈年のぼんになりました。父親が、豆を炒って、えびすさまにおそなえしていると、男がむすめをもらいに来ました。むすめは父親に、

「それでは、行ってまいります。一町目、一町目ごとに豆をまいていきますから、豆の花がさいたら、それをたよりにわたしをさがしに来てください」といいのこして、豆を持って出ていきました。



むすめが嫁にいつて三年たったある日のこと、父親は、庭に豆の花がさいたのを見て、むすめをさがしに行きました。一町目ごことに豆の花がさいていて、それをたどっていくと、山奥やまおくの大きな岩屋に着きました。中に、むすめと小さい男の子がいました。むすめは父親を見ると喜よろこんで、

「おとうさん、よく来てくださいました。この子はわたしの子どもです」といいました。そして、「わたしの夫おとは鬼おにです。見つかったら食べられてしまいます」といいます。そこへ、鬼が、大きい鹿しかをかついで帰ってきました。むすめが鬼に、

「これは、私の父親です」というと、鬼は、にやつと笑っていいました。

「うまそうな酒のさかながやってきたなあ」

つぎの日、鬼は狩かりにでかけるとき、父親に、

「粟あわい一斗いっとうをまくだけの広さの畑をたがやしておけ。おれが帰ってきたとき終わっていないなかつたら、おまえを食べてしまふぞ」といって、出ていきました。

父親が畑をたがやしていると、孫まじの男の子がおべんとうを持ってきて、

「じいちゃん、休んでてちょうだい。おれがたがやすから」といって、あつというまに広い畑をたがやしてしまいました。

つぎの日、鬼は、

「きのうたがやした畑に粟をまいておけ」といって、狩りに出かけていきました。

父親が畑に出て、

（こんな広い畑にどうやって粟をまけばいいんだろう）と思っていると、男の子がおべんとうを持ってきて、

「じいちゃん、おれがまくから」といって、あつというまに粟をぜんぶまいてしまいました。

そのつぎの日、鬼は、

「きのうまいた粟をぜんぶひろい集めておけ」といって、出ていきました。

父親は、男の子に、

「いくらおまえでも、こんどはどうにもならんだろう。逃にげることにしよう」といって、

むすめと三人、逃げるしたくをしました。男の子は、隠してあった祈年の炒り豆を持っていききました。

三人が山の中を逃げていくと、後ろから鬼が追いかけてきました。男の子は、「じいちゃんとかあさんは、先に行つといて」というなり、ふりむいて、鬼に向かって、「おには外」と、炒り豆を投げつけました。すると、豆が鬼の角に当たって、おれてしまいました。鬼は、力がなくなつて、いちもくさんに逃げていつてしまいました。

男の子は、ふたりに追いつくと、

「おれは、村の氏神だ。おまえたちを助けてやりたいと思つて、子どもに生まれてきたんだ」といつて、すつと消えてしまいました。

おしまい。

* 祈年…節分のこと。



原話…『大和民俗復刊第二号』奈良教育大学民俗学研究会

再話…村上郁